学者としての高田先生

愛知大学教授　河　合　秀　敏

高田先生にはじめてお目にかかったときは、いまから思うと45年前のこと、神戸大学大学院経営学研究科の院生として私が久保田音次郎教授のゼミに入り、久保田教授の研究室において初対面の挨拶をする際に先輩として同席しておられたのであるから、召されて10年となると、おつきあいのあった期間は35年間となる。

当時、高田先生は神戸市長田に下宿されていた。下宿の周辺はゴムのアサブラやサンダル、長靴などを作る町工場が多いと聞いていた。阪神・淡路大震災の時にはその一帯は火災に見舞われ焼失したことであろうとこころを痛めたことであった。高田先生はこの長田にいたはずだ。もくもくと上がる噴煙の様子を放映するテレビに食い入った思い出もある。

当時の神戸大学は、会計学の研究が旺盛で、久保田教授をはじめ、山下教授、丹波教授、溝口教授、戸田教授、谷端教授、渡辺教授等の面々から学問研究の厳しさを教育されたものだ。証券取引法会計の制度化途上であるだけに戦前のドイツ会計学である動態論の華やかさに加えてアメリカ会計学ならびにアメリカ監査論の研究に関心が高まっていた時代である。制度の確立にむけて監査基準の設定と運用上の問題に論点が集中していた。

高田教授は監査論の中でも取り分け重要課題とされていた監査報告書を巡る研究それもアメリカ研究に集中しておられた。久保田研究室は六甲台の図書館の隣にあり、書棚に狭まれた僅かなスペースに肩を擦り合わす様な格好で折りたたみ椅子をならべて発表会を行い、討論を深めたのであった。緊張の漂うひとときであった。少しばかり博多ナマリがあるトツトツとした発表は説得力のあるものであった。当時の記憶はさだかではないが、高田正淳教授（神戸大学）、高柳龍芳教授（関西大学）、森実教授（香川大学・神戸大学）、宮村公認会計士、佐野公認会計士、枡田公認会計士、三雲高校校長が参加されていたように思う。高田先生は九州からこられたこともあって特別の扱いを皆さんから受けていたように見えた。誠実そのもので、母一人を九州に残してひとり神戸で勉学に励んでいた姿は印象に残る。久保田教授による関西監査研究会での活躍ぶりも格別であったことを記しておきたい。こんな恵まれた学問環境の場をえて研究は順調に進展し、論文の発表から、学会報告、さらには近代監査報告書論（中央経済社）へと結実していった。

高田先生に招かれて私は西南学院での集中講義の機会を得た。また、西南学院と福岡大学との野球の試合（九州での早慶戦）も観戦できた。そのとき西南学院は敗北した。西南のピッチャーであったらしい高田先生の苦笑は忘れられない。負けはしたもののこだわりはなく、淡々としているのが高田先生のとりえであったようだ。「ナッチョラン」ぐらいの発言で後に残さないといった良い性格の持ち主であった。大博多カントリーでゴルフも御一緒したことがある。

高田先生は豊橋にこられて私の家に泊まられたこともある。高田先生からいただいた博多人形が置きみやげとなってしまった。過日奥様も豊橋にお越しになり、亡き家内の冥福をお祈りしてくださった。豊川稲荷に立ち寄り、蒲郡プリンスホテルで海を眺めながら夕飯を取ったが、話は常に高田先生のことに終始した。高田先生はいまも私のこころで生き続けている。